

論文

在日韓国・朝鮮人のアイデンティティと多文化共生の教育

——民族学級卒業生のナラティブ分析から——

梁 陽 日*

1. はじめに

筆者は、民族学級の民族講師として12年間教壇に立ち、延べ2000名以上の韓国・朝鮮にルーツを持つ子どもたちと出会ってきた。その中で、多様化していると言われて久しい在日韓国・朝鮮人の実状はどうなっているのか、民族学級での教育活動が在日韓国・朝鮮人のアイデンティティ形成にどのような影響を与えているのか、について模索しながら実践してきた。

本稿は、上記の問題意識のなかから、「民族学級」卒業生のインタビュー調査からアイデンティティを獲得するプロセスを明らかにし、その条件を描き出すことを目的とする¹。

具体的には、筆者が携わった大阪市立A小学校民族学級を研究対象とし、特に成人した卒業生のインタビュー調査を題材とする。

在日韓国・朝鮮人の教育とアイデンティティ形成に関わる先行研究として、ここでは福岡安則・金明秀による『在日韓国人青年意識調査』（福岡・金1993年）、金泰泳による『アイデンティティ・ポリティクスを超えて』（金1999年）の二点を取り上げる。以下に要約しておこう。

まず、福岡・金の調査は、民族団体の協力の下、全国の18歳から30歳までの約二千名の在日韓国人青年を抽出して、全国規模でランダム・サンプリング調査を実施し、回収した調査票の分析を通して、在日韓国人青年のアイデンティティの特徴を明らかにしたが、その特徴には五点あるという。

第一に、求心性についてである。意識調査の分析から在日韓国人青年が内面化している文化は、日本社会の文化と「民族的文化」が混入した文化であり、その「民族的文化」も本国の民族文化そのものではありえないとする。

第二には、多義性である。民族的アイデンティティには「関係志向性」（民族への愛着）と「主体志向性」（民族を求める自負）の二つからなるということが調査で明らかにされ、民族的アイデンティティそのものは単一ではないという。

第三には、自生性である。調査の最大の発見は、差別や不平等によって民族的アイデンティティが受動的に規定されるのではなく、「獲得」と「継承」という自生的な再生過程を持つと確認されたことである。

第四には、創出性である。在日韓国人青年の民族的アイデンティティ獲得は、たんに「継承」されていくものではなく、それを新たに創造し、「獲得」していくものだとすることを明らかにしている。

第五には、「日本への愛着」である。在日のエスニシティの強さや弱さに関わらず、総じて在日韓国人青年の日本への愛着は強いと結論付けられる。この分析を通して、在日韓国人青年は未来を共に築く空間として、すでに日本を選択しているとのことである。

つぎに、金はその著書において、大阪府高槻市が主催する在日韓国・朝鮮人教育事業の子ども会活動への参与観

キーワード：在日韓国・朝鮮人、民族学級、民族的アイデンティティ、多文化共生教育、ナラティブ

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2008年度入学 公共領域

察や関係者インタビュー分析を通して、在日朝鮮人の多様なアイデンティティの意識状況を把握することに取り組み、その分析を通して、柔軟なアイデンティティのあり方について言及している。その内容は、在日朝鮮人一世から三世にわたる世代を超えたインタビューを織り交ぜながら、在日朝鮮人のアイデンティティの歩みを概観するものである。

在日朝鮮人一世は植民地時代から現在にかけて日本社会から一貫して蔑視・抑圧の力を受けてきたが、常に「同化と排除」という日本政府の政策に翻弄されながら、「民族の誇り」を示すことでその反動に対抗してきたと金は分析する。

この抵抗の手段としての在日朝鮮人アイデンティティの形成には、在日朝鮮人教育が大きな役割を果たしてきたと金は見る。このような点では、在日朝鮮人教育は、民族の言語・文化・歴史の学びを通して「民族の自覚と誇り」を育てることと、日本社会からの同化の圧力に対抗していくことを目標とする営みであったといえるだろう。

二世については、従来の民族像と現実世界の狭間で葛藤する在日二世のアイデンティティの模索に焦点を当てている。一世の苦勞を見て育ち、「一世的価値観」を強く内面化しつつも、日本社会からの差別的処遇による疎外感、そして抽象化された「民族」や「母国」の狭間で二世たちのアイデンティティは境界に追いやられた、と金は言う。このような二重の葛藤の中で、二世たちは観念的な「祖国」や「民族」に依拠することなく、現実生活に根ざした生き方を模索しながら「在日志向」とも言えるあり方を確立し始める。

アイデンティティが抱えるジレンマと、その超克の可能性について金は、子ども会活動に携わる指導員や子ども会の卒業生、そして現役の子ども会参加者といった三世たちのインタビューを紹介している。指導員のインタビューでは各自の教育観・指導観が述べられており、そこでは従来の一枚岩的な在日朝鮮人アイデンティティに対して批判が述べられ、在日朝鮮人の社会的立場の自覚、その差別的状況を改善していく反差別的姿勢を持って生きていくことをめざすことであり、金はその姿勢をあたらしい民族像の創造と位置づける。

同じく三世で、子ども会の卒業生のインタビューでは、当時の活動を回想しながら現時点での評価を語っている。子ども会活動が伝統的アイデンティティ（＝祖国・民族との一体感を強調する像）を相対化し、より柔軟な差別と闘う主体としてのアイデンティティを育む場としての機能を果たしてきた。しかし、それは一方で「期待される子ども像」を固定化し、その絶対化された像が子どもたちや指導員を逆に拘束する機能を併せ持ったのではないかと分析する。

硬直したアイデンティティを超えるためには、むしろ子ども会活動の一線から退き、高校では本名から通名に変えて生活するある参加者の姿を紹介し、民族的自覚が喪失した姿としてみるのではなく、柔軟な民族性を生きるものと分析する。それは、日本社会という差別空間を抗いながら生を営んでいくための在日朝鮮人の生きる方策と金は結ぶ。

いずれも教育と関連させて在日韓国・朝鮮人のアイデンティティ形成を分析するものであり、筆者が展開する研究の意義や目的に多く示唆を与えている。

福岡・金の意識調査は、「在日韓国青年」の意識の全体的な傾向を調査データの分析結果から客観的に分析した研究であり、在日韓国青年のアイデンティティの獲得の諸条件や複数からなる志向性について明らかにしたことの意味は大きい。しかし、この調査では「朝鮮籍」や帰化・国際結婚の出生により「日本籍」を持つ青年については調査対象としていない。そのため、在日韓国・朝鮮人全体のアイデンティティ像として捉えることができるのかという点では疑問が残る。

そして、量的調査によって一定の傾向は確認されたが、その具体的な個々の在日韓国・朝鮮人青年の生の姿を描き出すことがなされていないと思われる。本稿では民族学級の卒業生のインタビューを通じて、具体的な実像に迫っていく。

金は、在日朝鮮人の各世代のアイデンティティの揺れと教育観の変遷を参与観察とインタビュー調査から明確にし、在日朝鮮人教育は今なお有効でありつつも、その過程で「見落とされてきたもの」「切り捨ててきたもの」に注目することを説く。彼は高校生の例を通じて、厳しい社会状況にある在日朝鮮人三世の若者が生きるための選択肢として主体的に選択したもの（例えば通名使用や、周囲への傍観等）を厳粛に受容しなければならないと述べている。しかし、その「柔軟なアイデンティティ」の内実や可能性について一人の高校生のライフ・ヒストリーから結論を

導き出すには具体性に乏しいのではないかと筆者は考える。

2. 民族学級卒業生のナラティブ分析から

2-1. インタビュー調査の概要

本稿では、成人している民族学級卒業生（1991年度から1995年度までの卒業生で計121名）を対象に、研究趣旨の呼びかけに応じた7名にインタビュー調査を実施し、その分析結果を示す²。

インタビューの目的は、民族学級で学んだ児童たちが成人してあらためて「自分にとって民族学級はどのような存在」であったのか、あるいは韓国・朝鮮人としての自我意識はどのように変化したのか、の2点を探ることにある。これら卒業生のライフ・ストーリーを通じて、民族学級の意義や、在日韓国・朝鮮人としてのアイデンティティの揺らぎや自覚の方向性について検討する。

インタビューを行った7名の対象者の経歴は次の通りで、名称はすべて仮名である。なお、⑤～⑦の対象者は、兄弟である。

- ①南博明（ナム・バンミョン、93年度卒業・現在、大学3年・22歳・両親が帰化により日本籍）
 - ②朴浩彰（パク・ホチャン、93年度卒業・専門学校卒業後に韓国留学。現在、韓国の料理店勤務・22歳）
 - ③任正和（イム・ジョンファ、93年度卒業・現在、大学3年・22歳）
 - ④趙寛仁（チョ・グァニン、93年度卒業・現在、大学3年・22歳）
 - ⑤崔康弘（チェ・ガンホン、92年度卒業・現在、大学4年・23歳）
 - ⑥崔綾子（チェ・ヌンジャ 93年度卒業・現在、大学3年・21歳）
 - ⑦崔亜紀（チェ・アギ、91年度卒業・現在、大学3年・24歳）
- ①～⑦の対象者の内、日常生活で民族名である本名を名乗っているのは②③④⑥の4名である。

2-2. 入級前の様子

対象者たちが在籍していた1991年度～1993年度は民族学級入級は5年生からであった。その当時の民族学級に対する印象や感想は年度によって若干意見が違うが、概ね入級を期待していたことが証言からわかる。特に1993年度修了の4名は顕著で、「4年生のとき、クラスの給食時間にソンセンニム（民族講師）がやってきて民族学級のアピールをしたんは覚えているわ。周りの韓国人の友達も面白そうやなあとか言ってたのも記憶にあるし。韓国人やから入らなあかんというよりは、どんな勉強するんかなあ、どんなおもしろいことするんかなあ、っていう好奇心が強くてすんなり入った」という発言に代表されるように、この学年は素直に入級したことが証言から読み取れる。ところが兄弟によっては、まったく民族学級に対して正反対の意見を持っていた対象者がいる。上に姉がいてすでに兄弟が入級していた崔康弘は民族学級に対して、「僕らも5年生になって入るもんなんや」という捉え方があり、妹の崔綾子も「みんな兄弟先に入っていたというのと、お兄ちゃんとかは、よう民族学級楽しい言うてたから楽しみにしてた」と振り返るが、ところが長女の崔亜紀は、「当時はね、どっちかって言うたら民族学級いややったんですよ。何でかって言うたら、いきなり5年生なってから“韓国人やから民族学級に入りなさい”って言われても普通は戸惑いますよね」と、弟・妹とは正反対の意見を持つ。

また、南博明の兄は「民族学級へ入るのをすごく嫌がってて、結局6年生からは行くのを辞め」、その理由を「“韓国人ばかり固まっているのは偏っていて狭く感じるから嫌だ”」と言う。このような落差を持つに至った背景は何か。

入級前、民族講師との交流を通して民族学級に興味・関心を持つようになった対象者がいることを考えると、否定的な対象者とその兄は事前に前任の民族講師との交流や、韓国・朝鮮について好印象を持つ出会いがあったのかというところに民族学級の印象の相違が起こるものと証言から推察される。

2-3. 民族学級に入級して良かったこと

これに関しては全員、共通しており、子ども民族音楽会や校内発表会（当時はクラブ発表会と並行して実施）に出演したこと大きく取り上げられている。男子はテコンドーを実演したが、朴浩彰は「発表会の時にやったテコン

ドーも楽しかった。発表会当日までは試し割り用の板が使えんから、ジャンプとか漫画や電話帳に向けてどついたり、けったりして練習して、当日割る瞬間までドキドキしてたり。そんで本番で割れたときはものすごいうれしかったんをムッチャ覚えてる。あれはホンマやってよかった」と当時の興奮を忘れないし、同じく趙寛仁も「テコンドーやったのはむっちゃエエ思い出や。練習のときは、ようソンセンニムに怒られたけど、ホンマもんの大人用の板を割るのはものすごい緊張したけど、割れたときに起きた観客の大きな拍手も忘れられへんし、きついで練習もやってよかったなあって思ったもんな。だってあの割れた板みんなて宝もんみたいに大事に持って帰ったしな。子どものときの一番エエ思い出や。あれが一番、民族学級に入ってよかったことやなあ」と発表会の思い出を一番に挙げる

各発表会というのは普段の学習の成果を出すことを目的にし、手段として民族衣装に身を包んで民族文化を披露するものである。これは子どもたちにとって、韓国・朝鮮人としての自己を発表会の観衆にさらけ出すことである。そのため、大きな晴れ舞台として位置づけられる。

しかも、過去に学んだことのない民族の舞踊や楽器演奏、演武の取得も難しい中で、小学生なりに真剣に取り組み、その結果、日本人児童や保護者など周囲から称賛されるという体験は、対象者の成長過程の上で良い影響を与えていると上記発言から考察される。

それ以外でも対象者たちは、「韓国に親近感が持てるようになったことや、挨拶を知っているだけでも良かった」ということを複数述べたり、「何やっても楽しかったわ。見ることも聞くことも、みんな新鮮やったし、ものすごい楽しかったことが全て。後から考えたら、民族学級って自分を知るとても大切な場所やな、ってすごく思う」（崔綾子）と、民族学級で学んだことを肯定的に捉えている。

また、他の理由では日本人児童との関連で述べたものがあり、「良かったっていうか、全体的におもしろかったで。なんか日本人の子がやってへん面白いことをやってるっていう優越感みたいのもあったし」（趙寛仁）、あるいは「民族学級で勉強することは何でもかんでも始めて習うもんばかりやから、珍しいし面白いやんか。民族（学級）終わってクラスに戻ってから、その日習ったインサ（あいさつ）とか日本人の子らに言ったりしたりしたな。他の子（日本人児童）は何のことか分からんからポカンとしたり、“何それ！？教えてや！！”って言うてきたりとかしてて、その反応見るのが面白かったりしたなあ。自分らの中でクラスの子らが知らん秘密を持ってるといいうか、そんな得した気分できてたんような気がする」（任正和）と言い、「クラスで全然民族学級のこととか、韓国のことを（授業などで）取り上げてもうたことなかったけど、それでも俺らで日本人の子らに民族学級で教えてもうたことを教えたったり、秘密の合言葉みたいに韓国語の言葉使ったりして遊んどったな。俺らが楽しそうにしてたらクラスの日本人の奴らが“お前らええな、楽しそうで。俺も入りたいわ”って言うてた事があって、あれは笑えたな」（趙寛仁）と振り返る。

崔綾子は、子ども民族音楽会で民族衣装であるチョゴリを着けて発表に臨んだが、その際、あまりのうれしさに他の友人たちとともに「会場まで衣装のまま着て、電車乗ってそこから桃谷駅降りて、商店街歩いていった」体験を挙げ、「電車の中のお客さんとか、商店街の人らみんなチョゴリ着た私らのほう振り向いて、“きれいな”とか言うてるん聞こえてきてものすごい自慢やったわ。発表終わってからも、みんなチョゴリ脱がんとそのまま家に帰ったけど、あの時はなんか着替えたくないって言う気持ちでいっぱいやった。すごいいい体験したと思う」と積極的に韓国・朝鮮人である自分の姿を前面に出しながら活動していたことを振り返る。

従来はマジョリティである日本人と違うということを非常に韓国・朝鮮人の子どもたちは非常に恐れていたが、対象者はむしろ、その違いを楽しんでいる様子が見て取れる。

民族学級を通して、多数派の動向に一喜一憂するどころか、自らの違いを是として、楽しみながら民族という個性をのびのびと成長させようとする意欲が見て取れる。

2-4. 印象に残るエピソード

民族学級在籍当時の印象に残るエピソードを対象者に出してもらったところ、前項の「思い出」のほかにも、ここでは楽しかった出来事以上に、様々な新たな気づきや葛藤についての事象が話された。それは、1) ダブルについて、2) 学校体制について、3) 卒業式の日丸・君が代についてである。

2-4-1 ダブルについて

南博明は、民族講師の語った「帰化して日本籍でも、民族の仲間や」ということと、「国際結婚で生まれた子はーフやない、ダブルや」という言葉がすごく印象に残っていると言いき、その理由は「日本籍を持っていることは民族学級ではアカンことかなって言うイメージがあった」から起こる日本籍者としての葛藤があったことを告白している。

「けど、ソンセンニムが言ったことはホンマその通りやなって納得できたし、うちのお父さんも国際結婚で生まれているし、自分も将来日本人と結婚するかもしれないって考えていたから、（ーフっていうことは）それも悪いことやなくて肯定的なええことなんやって気づかされた」（南博明）

本来、A小では韓国・朝鮮籍を持つ児童は民族学級に入級する、という原則を掲げてきたが、南博明のような日本籍者はまったく、対象外であったし、子どもたちや保護者自身も民族学級との関わりを避けてきた。しかし、日本人との国際結婚は8割を超え、帰化する人口も増加する中で、これらの人々を排除する理由は何処にもない。むしろ、韓国・朝鮮の民族にルーツを持つ日本籍者が将来的には在日社会の中で多数派になることが予測される現状では、従前の民族観で民族教育することは困難であり、むしろ積極的に、多様な個性を持つ在日に開かれた教育を実施することが新しい展望を切り開くのではないか。

南博明のエピソードは、未来の民族学級や将来の外国人教育を創造する上でも大きな参考になると言えるだろう。

2-4-2 学校体制について

様々な証言から、対象者は民族学級での学びを有意義で楽しいものと捉えているが、反面、クラス担任や学校そのものに対して憤りや批判を持つ者もいる。崔康弘は卒業から11年経つが、いまだにその時の事象を忘れない。以下は長文だが彼のエピソードを見てみよう。

「はっきり覚えてるんは、民族学級に対して担任の先生や教頭がものすごい嫌がらせいうか、反対してたのを覚えてますわ。僕らが発表会の練習のために体育館使ってたときに突然教頭がやってきて“勝手に体育館使うな”っていきなり練習中に中止にさせられたり。あれって、放課後でしょう？民族（学級）以外は授業あれへんのに、何で民族が体育館使おうたらあかんねんってみんな怒ってましたもんね。あの後、お母さんが民族の練習見に来たのに体育館閉まってて誰もおれへんからおかしいなあ言うて、職員室におった教頭に“民族の授業、体育館でやってませんのん？”って聞いたら、教頭は“体育館はちゃんとした授業以外は使いませんから、民族は教室違いますか”って言うて、それ聞いたお母さんが怒って“何ですか。民族の時間はちゃんとした授業と違いますんか。韓国人の子らが使うたらあかんのですか。まるで民族学級は差別の時間やないですか”って抗議したら、教頭の奴は謝りもせんと“そうです。民族は差別の時間です。ホンマは必要のない時間なんです”って言うたんですよね。

それでお母さんも思っきり切れたらしくて、“何言うてはるんですか。民族は昔からこのA小学校にあるんでしょ。学校の大切な取り組みの一つでしょう。責任者の教頭先生がそんなこと言うていいんですか！！”って大きい声でどなったらしいけど、教頭は謝りもせんかったらしいんですけどね。

その日、僕が民族から帰ったらお母さんやお父さんに練習を妨害された話をしたら、ちょうどお母さんが教頭の話をしてたところでそれで余計みんな怒って、すぐ山口さん（89・90年度保護者会会長）に連絡入れて、いっしょにお父さんと学校に抗議しに行きましたね。だけど、お父さんと山口さんが校長・教頭会って抗議したら、校長が謝るどころか“地域の人でも韓国人にいい感じを持っていない人もいるし、民族学級は本当は目立たんようやってほしいんです”って訳わからんこと言うから、それで二人ともまた怒って“民族学級をつぶす気か”って言うたら、校長は“いや、私がいる間（在職中）は困る。自然とそうなる（民族学級の消滅）のは構わないが、私がいるときだけはそれはないです”って言うたんですよ。お父さんも学校から帰ってきた時、“あれでも教育者か”ってすごい怒ってたな。」

これは1991年の出来事である。1991年といえば、韓国・朝鮮人児童の在籍率が全体の36パーセントを超え、外国人教育推進の加配教員が配置されていたにもかかわらず、民族学級を巡るエピソードからは外国人教育を推進する姿勢は見当たらない。子どもたちは教頭・校長といった管理職だけでなく、その批判を担任にも向ける。崔康弘は次のように証言する。

「その件だけでなくとも、何かにつけて教頭が文句言いにくたり、しかも僕ら（子どもが）おる前でそんな態度取るから、僕らものすごい腹立ってましたわ。担任も民族学級のことにってはほとんど無視やったし、僕らも友達同士で“何か俺ら韓国人って学校におったらあかんのか！！”ってものすごい反発してたんありますわ。」

自分たちの存在がないがしろにされていると感じた当時の児童たちは次第に学校や校長・教頭など日本人教員への反発から、学校体制そのものへの反発に転化し、卒業式の日の丸・君が代に対して、拒否の姿勢を打ち出す。

「そのつもり積もった反発が出たんが、卒業式の日の丸・君が代なんです。何で韓国人の僕らが日の丸掲げてるところで、しかも歌うたわされなあかんねんっていう反発があったし、気持ちよく民族学級でやったことを否定された怒りいうか、そんなんが卒業式の時に〔民族学級の〕みんな立たん座ったのにつなりましたからね。

あれは卒業式前にみんな集まって、みんなで絶対君が代のときは立たんこなあって前もって話し合いましたもんね。それにすごいなって思ったんは、やっさん〔民族学級の同級生〕なんか卒業式の練習のときから先生に怒られてもずっと座ってましたからね。その日〔卒業式〕のことは『やったあ！！』って言う気持ちでいっぱいでしたわ。でも今からふりかえったらものすごい中身の濃い2年間でした」

上記、崔康弘たちの行動の是非はともかく、民族学級に否定的な学校環境は対象者たちの自尊心を傷つけるとともに、差別や抑圧の対抗としての集団アイデンティティを機能させる機会になっている。

2-5. 現在の心境・卒業してからの歩み

2-5-1 民族学級を振り返って

対象者が民族学級を卒業して成人した今、あらためて民族学級についてどう捉えているか。率直に聞いてみたところ、崔康弘は「それと昔（当時）よりも、今になって民族学級行ってよかったなと感じますわ。何でかって言うたら僕は中学・高校時代は民族について勉強したり、ふれる機会ってまったくなかったんですね。それで大学入ってもどっかの民族団体に入ってやってるわけでもないんですけど、でも僕は誰に対しても隠すことなく“僕は韓国人やで”って言えるんですよ。他の子なんかそんなん隠してる子なんかたくさんいるやないですか。でも僕は「江藤」という日本の名前名乗っても、ちゃんと隠さんと“韓国人や”って普通に言えるのは、やっぱり民族学級のおかげやなあ、って今になって感じるんです」と、気負いや隠すことなく、ありのままに韓国・朝鮮人であることを自然に語れることが良かったと語る。

民族学級に参加することが嫌で消極的だった姉の崔亜紀も「でもよくよく考えたら、民族学級って大事やなって今は思うんですよ。何でかって言うたら、私は小学校以来、民族について学ぶ機会ってないんですよ。そういう意味では私にとっては、民族学級が唯一の民族との出会いやったんですね。だから、自分が韓国人やって言う自覚は民族学級があったからもてるようになったし、そういう意味では貴重な出会いの場やったな、って今になってそう思いますね」と、民族学級は自分が何者なのかを知る貴重な出会いとつながりの場であったと振り返り、認識を改めている。

また、民族学級との出会いが自分探しの機会となった、と韓国留学中の朴浩彰は語る。

「今、韓国で留学して生活してるのも民族学級の影響が大きい。民族学級での勉強がなかったら韓国へ行ってみたいって思わへんかったし、また一から韓国の大学へ入ろうとは考えなかった。留学したんも、もっと自分の

ことを知りたいという気持ちが強いため。それに留学してから韓国の人や在日のええ友達がいっぱいできたのもすごくよかった。在日の留学生の中にはまじめに勉強せんと、遊んでばかりの子も多いけど、僕はそんな子らとは付き合いたくないし、全然誘いがあっても無視してる。

せっかく韓国へ行ったんやからそんなんと付き合っって無駄な時間を過ごすより、思いのあるまじめな同胞らと出会っってつながってるほうが大事やから。それと韓国へ行って何よりもよかったんは、韓国語が話されるようになっていろんな人と知り合えたこと。他にも自分のコヒャン（故郷）へ行って親戚や村の知り合いからおじいちゃんはどうやって朝鮮半島から日本へ渡っていったかってその時の様子を聞いたこともよかった。コヒャンでの暮らしぶりや渡日の理由なんかお父さん、お母さんも知らんことやのに、自分が韓国行って、言葉覚えたことで自分のルーツや歴史を知れたんは何よりも良かった。そのきっかけは何度も言うけど民族学級のおかげや。だからすごい感謝してるし、民族学級に入ってラッキーやったと思う。」

韓国留学が、新たな仲間との人脈を広げ、さらに自分の家族のルーツも知ることで民族的自覚が生まれ、何よりもやりがいを見出した満足感が感じ取れる。このように、民族学級との出会いが対象者に韓国・朝鮮人として生きることの意味を探る大きな機会となっていることは間違いないだろう。

2-5-2 将来の願い

将来展望は各自によってそれぞれ違うのは当然としても、その中に共通した要因として韓国・朝鮮人としての生き方の模索が見え隠れする。

崔康弘は、あらためて自己のあり方が大きく揺さぶられる被差別体験をした。

それは就職活動中、企業から国籍を理由にして内定を取り下げられるという差別体験であった。

「相手は大手の企業で、業界でも第2位のとこなんですけど、3次まで通って、それで最後の社長面談も通って内定出たんですよ。その時に向こうの人事課長さんと具体的な職域の話とかしたりして、それで課長さんが“最後に何かない？”って言うから“僕韓国人ですけど、大丈夫ですよ”って聞いたんですよ。そしたら一瞬間があいたんやけど、課長さんは“そんなん大丈夫や。うちは何も問題ないから”って言うてくれたんですよ。ところがそれからすぐ辞令を出す言うてたんやけど、いっこうに送られてけえへんからどうしたんやろって思っって、すごい気になって会社に電話入れたんですよ。でもいつも不在で、そっから段々不安になってまた電話を入れたある日に別の部署の部長さんと話ができて、事情を説明して辞令こないんですが大丈夫ですかって聞いたら、部長さんは内定出てるんやったら大丈夫ですよ、って言うてくれたんですよ。それから待ってもやっぱり来ないから、また電話を入れたら、やっと人事課長がつかまって話できたんですよ。それで、僕の辞令はいつ出るんですかって聞いたら、それはわからんっていうんですよ。そして、“雇う・雇わないはこちらに決める権限があるから、気に入らんやったら来てもらわんでもかまへんねんで”って言われてビックリしたから、僕が韓国人やからダメなんですかって言うたんですよ。そしたら向こうは“いや違う、君は優秀な学生やからそんなん関係ない”って言うだけで後は何も言わへんんですよ。内定とって、優秀やったら何で入れへんねん。おかしいでしょう？ものすごい、ショックやったですね。」

彼はどうしていいのかわからず誰にも相談できないまま自宅に引き込まれるようになる。差別に対して「親から韓国人は差別があるからがんばらなあかんって言われて、育ったけど、そんなん昔話やって思ってたから。まさか、いまどきに、しかも自分が差別を受けるなんて……」とその衝撃を語り、「みんな就職きまつてるん横目で見ながら、お前らは日本人やからええわな！って内心すさんでましたね」と文字通り自暴自棄に陥っていたという。しかし、その様子を知った母親が市民団体に相談したことから彼の事態も好転していく。

「そこに韓国人の相談員さんがいてくれて、すごい応援してくれて、その人の配慮で大学と話し合いができるようになって、大学も理事さんとか、就職課長さんがと話し合いに出てきてくれて、僕の話も聞いてくれて、そ

の企業については許さず抗議するとか言うてくれて、また僕の就職も応援するって言うてくれたんですよ。ものすごいありがたかったですね。思わず皆さんの前で涙でましたもん。」

「その時。おんなじ韓国人の人が相談のって来て動いてくれたこともありがたかったし、ましてや大学の人のように日本人でも僕の話に分かってくれる人がいるんやっていうのが、すごくうれしかったです。それまで、はっきり言うて日本人なんか俺の気持ちなんかわからへんやろうなって、ものすごいネガティブに考えていたから余計、安心しましたね。」

崔康弘は、周囲の支えや理解によってようやく立ち直って進路に向き合うことになるが、その就職差別をきっかけに彼は今まで以上に自分の生き方を見つめ直すようになる。

「それまでの間、自分ってなんやろうってすごく考えるようになりましたよね。僕は韓国人言うことで差別されたけど、でもよく考えたら韓国人いうても言葉も知らんし、文化や歴史もほとんど知らへん。いったい自分ってなんやろう。ましてや日本で生まれて育てるのに、国籍やルーツが違う自分っていったいなんやねんって、こもってる間はそんなばっかり考えてて、そっから何にも知らんまま世の中に出るよりも、自分を見つめる作業してから社会に出たいって思うようになって、そっから韓国へ行って言葉とか勉強しながら、自分を見つめる時間がほしいなって、そっから就職せんと韓国へ留学しようと決めたんです。」

彼はあえて進路決定を延長してでも韓国留学にこだわる。その理由は「今の気持ちは韓国人は悪いもんじゃなくて、自分の中にはいっぱいええもんがあるのを見つけて帰って来たいですね」と次なる人生のステージに希望を見出そうとしている。

崔兄弟は両親から数年前、将来的に帰化する計画を持ちかけられるが、「兄弟そろって反対しましたね。そんな必要ないって。親は“帰化は便宜的なもんやし、私らの将来を思ってええんと違うか”って言うんですけど、それでも私ら全員反対でしたね」と両親の意向を兄弟全員で反対し、「“そんなに帰化したかったら、お父さんとお母さんだけしいな”」と言い、断念させたという。

崔重紀は「私ら考えや生き方違うはずなんですけど、そういう部分は（考えが）一緒ですね。前にワールドカップのサッカーやバレーボールあったやないですか。あの時も私ら兄弟は韓国を一生懸命応援してましたもんね。お父さんらは日本を応援してたみたいで、私らそんな親見て許しませんでしたもんね。おかげで親は小さくなって黙ってテレビ見てましたね」と、親との意識の違いを語る。

この崔兄弟と両親の意識の相違はどのように形成されたのだろうか。通常、移民や外国人が定住すれば、そのホスト社会に溶け込み、生活習慣や意識はマジョリティのスタイルに同化するというのが定説だが、崔兄弟たちはむしろ、言葉の取得や母国留学、帰化の拒否という態度を取りながら、二世の親以上に「民族」にこだわりを見せる。同化よりも異化の生き方を選択しているように思える。

この兄弟の行動は、「韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティは自明の民族性や文化の「継承」という過程よりも、欠如観あるいはもっと積極的に豊饒化したいという主体的な行動の選択により「獲得」するものである」という福岡・金の仮説を実証するモデルとして見ることができる。

3. インタビュー対象者の考察

3-1 「民族学級の思い出」の共通点

民族学級については、「入級する前の意識」「民族学級に入級して良かったこと」や、「印象に残るエピソード」を中心にインタビューした。ここでは、ほぼ全員が「民族学級に入級して楽しかった」と述べた。具体的には「民族学級校内発表会等で民族文化を披露したこと」「ソンセンニム（民族講師）と遊んだこと」や、「民族学級で学んだ韓国語や文化の学習」を挙げている。これらはまったく今まで学んだことのない異文化に近い存在の民族学習を、最終的には親しい自己の文化として肯定的に受容する結果に結びついているのではないかとと言える。併せて、証言

には現れないが、A小学校民族学級の特徴として在日の多住地域にあるということと、在籍の3割以上が韓国・朝鮮にルーツを持つ児童で成立しているということも見逃せない隠れた要因ではないか。多数、在日の子ども達が民族学級に結集していることは各人の内面に安心感を与えていたのではないかと考えることもできる。

福岡・金の意識調査によると、在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティは、同胞集団との情緒的な結びつきを重視する「関係志向」と、認知的・手段的な側面である「主体志向」とに分節化される。関係志向は、祭祀などの伝統儀式の実施を通じて主に家庭内で継承される。他方で、主体志向は、家庭内外での教育を通して、また、民族団体への参加や民族教育によって獲得されるものであり、家庭内で直接継承される部分はあまり大きくはないという。

そして、福岡・金は同胞同士のコミュニケーションを保障していくことが安定したアイデンティティ形成につながるものであり、教育に関しては、民族学校の規模拡大や、公立学校における民族学級の設置・拡大の必要性を説く。金の言説を借りるならば、民族学級の存在は子ども達に肯定的なアイデンティティを形成させる効果があり、そのことを、本稿で明らかにすることができたのではないだろうか。

3-2 「現在の心境など」の共通点

民族学級卒業から10年経つ中で現在の心境はそれぞれの思いで揺れている。各人がそれぞれ異なる歩みをしていながら、そこに共通しているのは『「民族」をキーワードにした生き方の模索』と読み取ることができる。

先に述べたように、福岡・金らは在日韓国青年の生き方を7つに分け分類し、その特徴について分析しているが、7つの志向性とは、①祖国志向型②同胞志向型③共生志向型④個人志向型⑤帰化志向型⑥葛藤回避型⑦葛藤型であった。

しかし、今回のインタビューでの分析を通じて浮上してきたことは、7名の卒業生を単純に上記の類型に当てはまることには抵抗がある、ということである。アイデンティティや生き方は不変なものではなく、常にその環境の変化に乗じてアイデンティティも生き方も変化していくものではないかと7名の調査から確信するようになった。

実際、人の考えや生き方は一面的ではなく、多面的に構成されているものであり、現に卒業生の中でも幾人かは多様な志向性を持っており、その時々状況にあわせて、福岡・金らが言う7つの志向性を往來しているのではないかと考えられる。

同時に彼らは多様な志向性を持ちながらも、何らかの意思で仲間の出会いやつながりを求めていることも、共通点として挙げられる。そして、それらのふれあいは多様な志向性を持つ在日韓国・朝鮮人にとって、安心感や自己実現を図る力の原動力として影響力を持つ。7名の卒業生は民族学級の体験からその機会を得たことが、本インタビュー調査から明らかになったと言える。

4. 結論

本稿では、7名の民族学級卒業生のインタビューからそのアイデンティティ形成の過程を見てきたが、在日韓国・朝鮮人は「民族」から逃れることが出来ない。そうした大人や社会の都合によって来る現実から、当事者の適応・違和感のあり様は千差万別であり、多様である。このような多様な現状を踏まえると、韓国・朝鮮人に限らず、ニューカマーや日本籍者も含めた異なるルーツを持つ存在も視野に入れていく必要がある。すなわち、多文化共生の教育の実施を持続可能なものにするためにも、多様なルーツを持つ者同士の共生をめざす外国人教育の確立が急務であると言える。

卒業生のインタビュー調査から伺えることは、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティ形成は、受動的な継承と能動的な獲得を繰り返す過程を経て確立されていると言えるかもしれない。その反面、従来の民族学級は、「あるべき民族像」（民族の自覚と誇り、祖国や民族集団との一体感等）を設定し、その尺度に基づいて子どもたちへの教育活動に取り組んできた感否めないだろう。子どもたちの実態から見て現実と理念の格差があり、場合によっては子どもたちのアイデンティティ形成にマイナスに働く作用を持つ。

今後、在日韓国・朝鮮人をはじめ、すべての外国人の子どものアイデンティティ保障に必要な方針として「ある

べき民族像」の追求から、「多様な生き方を支援する教育」への転換が求められる。例えば在日韓国・朝鮮人の通名（日本名）や本名の選択、すべてをありのままのものとして受け止める覚悟が求められる。この点を踏まえれば、問題は民族学級のあり方自体ではなく、当たり前の権利としての当事者のアイデンティティ保障なのである。すなわち子どものために必要なことは何かという視点＝多様性の尊重を原理とした新しい学校文化の創造の中で、その一人ひとりのニーズに応えていくことに繋げることが必要なのではないだろうか。

注

1. 民族学級の実践は「多文化共生」を教育の現場で模索することをひとつの課題として遂行されている。この場合、「共生」とは言うまでもなく「日本人」との共生である。本稿では、ひとまず周縁化／不可視化されてきた在日韓国・朝鮮人の置かれた状況について考察していくこととする。
2. インタビュー調査は2002年4月から2003年12月の間に行われ、個別インタビューは各人1～2回、全体では1回実施した。なお、調査は現在においても継続して行っており、インタビュー対象者の意識の変容過程を改めて発表していく予定である。

参考文献

- ・大阪府在日外国人教育研究協議会（1996）『21世紀を展望する多文化共生教育の構想～府外教のめざす在日外国人教育～』
- ・金泰泳（1999）「アイデンティティ・ポリティクスを超えて」世界思想社
- ・金明秀（1995）「エスニシティの形成論～在日韓国青年を事例として～」『ソシオロジ』124号社会学研究会
- ・金明秀（1996）「差別とエスニシティの潜在的因果構造～在日韓国青年を事例として～」『解放社会学研究』10号日本解放社会学会
- ・志水宏吉編（2002）「ニューカマーと教育～学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって～」明石書店
- ・宋英子（2002）「多民族・多文化共生社会のための教育環境に関する調査研究（Ⅰ）」『大阪市教育センター』151号
- ・宋英子（2003）「多民族・多文化共生社会のための教育環境に関する調査研究（Ⅱ）」『大阪市教育センター』159号
- ・朴正恵（2008）「この子らに民族の心を～大阪の学校文化と民族学級～」新幹社
- ・福岡安則、金明秀（1997）「在日韓国青年の生活と意識」東京大学出版会
- ・民族学級後任講師会編（1993）「コヒャンエポムーすべての同胞に民族教育をー」民族学級後任講師会
- ・民族教育ネットワーク編（1998）「教育改革と民族教育」亜紀書房

Zainichi Koreans' Identity and Diversity Education

YANG Yangil

Abstract:

Some *Zainichi* Korean children going to Japanese public schools, especially in Osaka, attend ethnic culture classes. What then is the meaning of ethnic culture classes for Koreans in Japan? I interviewed grown-up alumni of ethnic culture classes. From their narratives, I found that ethnic culture classes enabled students to accept their ethnicity positively by learning culture, language and games as well as by making friends with other *Zainichi* Koreans. In addition to that, their narratives show that they want to live with self-esteem and that the key concept for doing so is ethnicity. *Zainichi* Koreans should not be forced to exclusively choose either Korean or Japanese identities, to either assimilate to Japanese society or keep their Korean identity. Ethnic culture classes need to change their policies from seeking the "ideal ethnic image" to providing an education which supports diverse ways of living. In fact, the interviewees' narratives reveal the importance of diversity education not only for *Zainichi* Koreans but for all children in Japanese schools.

Keywords: *Zainichi* Korean, ethnic culture class, ethnicity, diversity education, narrative

在日韓国・朝鮮人のアイデンティティと多文化共生の教育 ——民族学級卒業生のナラティブ分析から——

梁 陽 日

要旨:

在日韓国・朝鮮人にとって民族学級はどのような意義があるのか。民族学級卒業生のインタビュー調査から、民族学級で学ぶ文化、言葉、遊び、民族講師や仲間とのふれあい等を通じて、民族的アイデンティティを肯定的に育成し、効果をあげていることが確認されている。そのライフヒストリーから当事者が求めているのは、「ありのままに自分らしく生きたい」ことへの希求であり、そのキー概念が「民族」であることも判明し、学校における多文化共生教育の重要性が確認できた。

また、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティは、固定的な志向性のような類型に必ずしも適用できるものではない。また、日本か祖国か、あるいは同化か民族かという二項対立でも括れるものではない。むしろ当事者のアイデンティティはそれらの志向性や境界を往来する可変的存在であることが分析の中で明らかになった。

